妄執果つるとき

西村寿行

角川文庫

昭和五十四年四月三十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

妄執果つるとき

著作者　西村寿行

発行者　角川春樹

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二振東京③一九五二〇八
電話東京(262)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・多摩文庫
0193-140715-0946(0)

妄執果つるとき

西村寿行

目次

第一章　五
第二章　七七
第三章　一五五
第四章　二〇三
第五章　二四七
解説　下村彰義　二七六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

1

中原広常は、その晩は当直であった。

夜食の出前を頼んだ。天丼であった。届くのがおそかった。心待ちにして、浮かぬ顔を刑事部屋の空間に投げていた。

中原はこのところ慢性胃炎にかかっていた。そのせいかどうか、腹が減ると胃が痛くなる。食事をすれば治るのだが、空腹のたびに胃の存在を感じて、いらだたしくなる。

――あの野郎。

出前に来る頭髪の長い、どことなく不潔な感じのする若者の顔を空間に描いて、中原は肚をたてた。

催促しようと電話に手を伸ばしたときに、その出前持ちが入って来た。

「まいど。天丼でしたね」

色の黒い若者の世辞を、中原は無視した。黙って机を指した。機嫌の悪いのを悟って、出前持

ちはそれ以上はものをいわずに引き揚げた。
中原は丼の蓋を開けた。割箸を割って軽くこすり合わした。
電話が鳴った。
中原課長をという電話に、おれだと中原は答えた。いやな予感がした。
「二丁目の火災現場から、焼死体が発見されました。至急……」
パトカー勤務の若い警官だった。
「他殺か」
中原は訊いた。
「殺して、火をつけたのではないかと……」
「すぐに行く」
電話を切って、数秒の間、中原は天井をみていた。食うには四、五分はかかる。結局、丼の蓋をした。立った瞬間にすっぱい胃液が動いて、胃全体が痛んだ。
「ひどい暑さだ」
中原は独りごちた。八月の終わりだった。秋が立っている季節なのだが、ベタリ、汗がシャツにねばっていた。冷房がないからよけいだった。どこかが狂っているような暑さだと、中原は思った。
署の中庭に出て、パトカーに乗った。

警視庁玉川警察署。中原は刑事課刑事一課の課長だった。警部になったのが二年前の四十二歳。中町二丁目で出火があったのは、知っていた。出火したのは鳥取県学生会館だと報告を受けていた。

パトカーは冷房がきいていた。

「この、くそ暑いのに……」

中原はまだ機嫌が悪かった。

玉川署と学生会館は五分とかからないところにあった。

中原が着いたときには、火災は玉川消防署の手で消しとめられていた。

学生会館はモルタル二階建てであった。階下が十室、二階が十室ある。全室とも六畳の個室になっていた。

出火したのは階下の七号室だった。

出火を発見したのは階下の一号室に住む西条昇（さいじょうのぼる）という大学生であった。西条は一階の端にあるトイレに行く途中で、七号室のドアから煙が出ているのをみた。ただの煙ではなかった。かなりの勢いで、隙間（すきま）から噴き出ている。ドアに火熱が感じられた。

「火事だッ」

西条は怒鳴って回った。その声で数人の学生が出てきた。ドアには鍵（かぎ）がかかっていた。西条は

体当たりをくれた。三回か四回目にドアの掛け金が壊れた。
黒煙が渦巻いて廊下に出た。黒煙の中に火炎がみえた。炎は壁全体に拡がっていた。
バケツを取りに走ったり、学生たちが動転して右往左往している間に、消防車が駆けつけた。
消防員は中庭に面したガラス窓を叩き破って、そこからホースを向けた。
鎮火するまでに五分とかからなかった。
消しとめて、消防員が部屋に入った。床に男が倒れていた。
男の名前は春川忠人。二十歳。

中原は死体をみた。
死体はうつ伏せに倒れて、右手を上に投げだし、左手は体の下に敷いていた。死体の着衣は焼け焦げていた。それを消火水が襲ったらしく、半裸体になっていた。皮バンドが傍に落ちて、半焼けになっている。
中原は無言で室内を見回した。死体の側の壁際に簡易ベッドがある。その並びに勉強机がある。反対側は洋服ダンスがある。洋服ダンスの焼損がもっとも激しかった。
「火元は、この洋服ダンスらしい」
現場検証をしていた消防司令が説明した。石渡という男だった。石渡は開いたまま黒焦げになった洋服ダンスの内部を覗いた。タンスの下部のベニヤは半分ほど燃え落ち、その下の床も燃え

落ちて、穴が穿いていた。残った洋服ダンスの半分には、焼け焦げた衣類が重なっていた。

ちょっと覗いて、中原は死体に視線を戻した。胃が痛んだ。

「この死体だが」中原は、石渡に訊いた。「消火ホースの水で突き動かされたということは、ないかね」

「あるだろうね。そう考えるのが常識です。広い部屋ならともかく、たったこれだけの部屋ですから」

「たとえば、ベッドに転がっていて、水勢で突き落とされた、ということは……」

「ベッドに転がっていて、それにホースの水が当たれば、落ちるでしょうね」

「そうですか」

中原はうなずいた。

死体を、中原はみていた。焼死体ではなかった。それは、はっきりしていた。窒息して焼け死んだものなら、死体は俗にいう死戦期の戦闘体形をとっている。背を曲げ、手を前に突き出して、闘いの姿勢になるのだ。死の苦痛と闘ってそうなるのだった。春川忠人の死体はダラリと伸び切っていた。

殺されて、ベッドに寝かされていた――中原は、なぜということなく、そう思った。勘といってもよかった。

「住人を、集めたのか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中原は傍にいた内山捜査員に訊いた。
「管理人室を、臨時の捜査部屋に使えるようにしてあります」
「本庁への連絡は？」
「それは……」
「何をしとる。捜査一課と鑑識課に連絡をとるのだ。ボヤボヤするな」
中原は眉をひそめた。内山はうつけのようにボンヤリと死体を見ていた。
――ボンクラばかりだ。
中原はそう思った。捜査員といっても、有能なやつはすくない。ボンヤリしているか、やたらに走り回っているのが多い。有能な男は本庁にとられる。
「暑くて、やりきれん」
首筋に流れる汗を中原は掌で拭った。この暑い最中に、人を殺した上に火を放つやつがあるかと、肚だたしかった。
――締め上げてやる。
中原は肚の中でつぶやいて、玄関近くにある管理人室に向かった。

2

鳥取県学生会館は県立のものではなかった。敗戦直後に県の有志が金を出し合って英才の続出

をめざすために設立した。成績優秀な者に奨学金を出し、会館に入れた。
現在はその伝統も、精神もない。入館している学生は秀才でもなければなんでもない。先輩たちの紹介で入って来る。よそよりは幾らか安いアパートだった。食堂もついているから、その点、学生には重宝がられた。
現在の居住人は二十人であった。
殺害された春川忠人は約三月前に入居していた。
まじめな青年であった。生家は鳥取市にある。父は飲食店を経営していた。四人兄弟の三番目であった。中央大学法学部に通っていた。二年生であった。性格は、どちらかといえば無口で、勉強家であり、倹約家でもあった。会館に入居して、日も浅いせいもあるが、部屋に閉じこもりがちであった。
その日、つまり八月三十日の午後六時半頃、春川忠人は管理人室の横にある食堂に姿をみせた。食堂は賄婦が二人でやっている。セルフ・サービスであった。
春川忠人は十数分で食事を終えた。食堂は学生たちの溜まり場みたいになっていた。将棋盤や碁盤が置いてある。だれが持ち込んだものかわからない。手垢に汚れた年代物である。たいていだれかがやっている。観戦者も多い。野次をとばしながらの観戦だ。
春川忠人はしばらく、碁を覗いていた。春川が囲碁ができるのかどうかは、だれもしらない。誘った者はあるが、春川は首を横に振った。ときに観戦はするのだから、初歩ていどの棋力はあ

るのだろうが、はにかみからか、孤独癖からか、碁石を握ったことはなかった。

七時頃に、春川は食堂を出た。いつもその時刻であった。食堂に来て、出る時間がほとんど決まっていた。

そのとき、食堂にはまだ十二、三人の学生がいた。食堂は朝と晩だけ開いていて、夏場は午後六時から八時までやっている。現金制ではなかった。寮費と一緒にその月の食費を払い込むことになっている。通常、八時のあとも十時頃までテレビを見たりして、食堂でねばるのがならわしであった。

わいわい騒いでいたから、食堂を出た春川がそこから自室に戻ったのか、あるいは散歩に出たのか、だれも見た者はなかった。

碁を打っていた西条昇がトイレに立ったのが、八時半頃であった。その頃には学生は六人に減っていた。トイレは玄関を入ったホールにもあるが、そこのは壊れていた。西条は廊下の奥の端にあるトイレに行く途中で、七号室のドアから黒煙の噴いているのをみた。

一時間ほどの間に、中原広常は以上の事情を知った。

すでに本庁の鑑識員が到着していた。鑑識課の車で警視庁科学検査所の技官も来ていた。その検査がはじまっていた。

「わけは、なさそうだな」

中原にそう声をかけたのは、着いたばかりの本庁捜査課の田川警部補だった。
「まあ、ね」
中原はあいまいにうなずいた。田川とは懇意の間柄であった。田川のいうように、そう難しい事件とは思えなかった。通り魔の犯行とは思えない。屈強の若者ばかりが二十人もいる学生会館に、強盗とか盗みに入るトンマもいまい。
――怨恨か、盗み。
中原はそうみた。それも内部の人間のしわざであろう。
「ガッチリ、絞り上げてみるか」
田川は椅子を引き寄せた。
「ああ」
うなずいて、中原は、タバコを抜き出した。
「どうした？　元気がないな」
田川が不審そうな目を向けた。
「胃が痛むんだ。ここのところ」
天井を、中原は思い浮かべた。
「いつまでも捜査員生活をやってると、そうなる。早いとこ、足を洗うにかぎるぜ。あの吉岡だが、いまは新宿の高層ビル管理会社の課長におさまって、持病がなおったそうだ。りゅうとし

た背広姿でね……」

「管理会社の、課長か……」

中原は胃を押えた。高層ビル管理会社の課長なら、まだよかった。中原は都の税金徴収課から口がかかっていた。先輩が警察を辞めて勤めていた。滞納者を説得して回る仕事だった。ふつうの人間では効果が上がらない。こわもてが第一義となる。刑事あがりが優遇されるゆえんだった。給料もよいし、そう忙しい仕事でもない。気楽だという。

だが、中原は徴税吏（デキュマン）にはなりたくはなかった。そうはいうものの、気力のある人間がつぎつぎと警察を辞めて行く中で、中原は焦りを感じていた。

中原と田川は、学生たちから事情聴取にかかった。

一通りの事情を訊き終えたのは、翌朝の午前三時であった。

中原と田川は連れだって、学生会館を出た。二人とも憔悴（しょうすい）が深かった。戦果はなかった。春川は入居してまだ三か月にしかならず、引っ込み思案的性格のせいもあって、交際らしい交際はだれともしてなかった。したがって、怨恨とは無関係のようだった。

「午後には、鳥取から父と長男が飛行便で到着するそうだ。たぶん、そっちから、動機は割れるだろう」

田川は楽観的だった。

「そうだな……」

そうなると有難い。春川忠人の金銭状態とか持ち物――そういった状況判断になるものが目下のところ、皆目わからない。死体からも、焼けただれた部屋からも、紙幣入れらしいものは発見されなかった。

「強盗殺人放火――まず、まちがいない」

田川が断言した。

中原は、ちらと田川をみた。口は開かなかった。田川は中背だが恰幅はよい。凶悪犯人の二人や三人は弾きとばしそうな体である。強引な捜査をする男だ。中原は上背はあるが、どちらかといえば痩身のほうだ。短気ではあるが、強引な性格ではない。田川のように、勘で断言することはめったにない。

「西条昇はドアを破っている。鍵がかかっていたのだ。しかし、死体は鍵を持ってなかった。部屋にもない。犯人は春川を殺して金を奪い、放火をした。鍵を奪って、外から施錠した。なるべく発見を遅らせるためだろう」

「たぶん、な」

中原は同意した。

検死医の現場鑑定では、春川忠人は鈍器ようのもので後頭部を殴打されていた。骨が陥没している。解剖を待たないと正確なことはわからないが、いまいった田川の推定はまちがいあるまい。犯人内部説をとれば、十人の男に容疑がかかる。二十人のうち、三人が鳥取に帰っていた。六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com